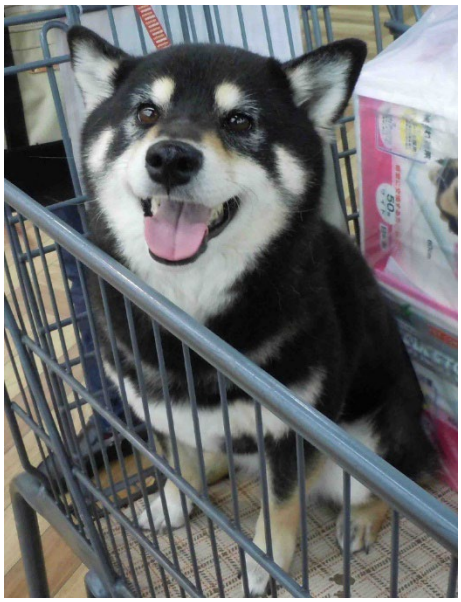
# さようなら「ふうちゃん」

関西大学　社会安全研究センター　小澤　守



さる 2024 年 9 月 2 日午後 10 時 30 分頃，我が家の柴嬢「ふうちゃん」が逝った．ほぼ 17 歳半，大病もせず，本当に安らかに永遠の眠りについた．熊本阿蘇の出身で，なかなかの美人顔である．やたら吠えることもなく，大変おとなしい，また至って怖がりの子であった．今回は極めて個人的な内容で読者の皆さんには申し訳ないが，17 年以上に及ぶ我が家での一大事件について書かせていただき，彼女に対する追悼とさせていただきたい．

筆者が住まいするのはマンションと称する集合住宅で，犬や猫の飼育は推奨こそされてはいないが，禁止もされていない．したがって当初から一定数の同居動物がいたことは確かである．筆者は田舎育ちで，農耕用の牛を飼っていたこともあったのだろう．犬を飼った経験はない．しかし近所に，決まって夕食時に我が家に現れ，ご飯にみそ汁の残りをかけた食事を見事に平らげて帰っていく，そのような通いの犬がいた．

17 年以上前のある日，娘の友達からメールがあり，生後すでに数か月になる柴犬をもらってくれないかとのことであった．そもそも集合住宅であり，周囲に迷惑をかけないか，毎日散歩など可能かどうか，いろいろ考えているうちに里親が見つかり，もらわれていった．1 週間ほどして漸く引き取る決心をしたところであったので，家内がひどく落胆したのである．その後，家内がネット上にかわいい柴犬の写真や，飼い主との記念写真などが多く掲載されているホームページを見つけた．阿蘇山のふもとで柴犬専門のブリーダーが開設しているページであった．

筆者が呉での講演を依頼された折のこと，ならば足を延ばして熊本まで行こうということになった．神戸から呉までと呉から熊本の距離を考えると大変な延長ではあったのだが．当該のブリーダーを訪れ，柴犬の様々な話を聞き，親犬たちの状況など垣間見ているうちに，一週間前に生まれた子供だといって 3 匹の黒柴の赤ん坊をみせてもらった．あまりの可愛さになかの一匹を我が家に迎えることを即決してしまった．その子が写真の「ふうちゃん」である．聞けばしばらくは母親のもとで，そして母親から離して生活させることが必要とのこと．神戸空港に降り立ったのは 2 か月後の 5 月の 13 日であった．

しばらくして気が付くと彼女にとっては 1 番が家内，ついで娘，筆者は第 3 位，つまり最下位という序列がついてしまっていた．もっとも平日も休日も朝と夕の散歩は基本的に筆者の仕事であった．この子がまだ小さく無邪気にボールを追いかけていたころ，散歩で知り合ったポインター，ドーベルマン，みんなほとんど同じ年であったが，一緒に仲良く走り回っているのを見るのはなかなかの壮観であった．犬にもいろいろ性格があること，好き嫌いがあることなど我々と同じで，ただそれをうわべでおおいかくさず明確に表現する．いっしょに遊んだなかにはいじわるな子もいた．犬を介して付き合いが飼い主をつなぐことも経験した．

日曜日などゆっくり寝ていると起こしに来る．写真は犬も同伴できるスーパーでの状況である．まるで人の子供のように目を輝かせてきょろきょろしていたのがとても

印象的であった．とても怖がりで，雷など鳴ろうものなら押し入れの奥に突進し，引っ張り出すのに一苦労したこともあった．非常ベルの点検があった時には，あちこちで絶えずベルが鳴るものだから怖がってしょうがない．たまたま鳴門の大塚美術館に行く予定にしていたこともあり，留守番をさせるのをやめて一緒に車で出かけた．医者に行くときには車に乗るのをとても嫌がるのだが，それとはまったく違っていかにも楽しげであった．おかげで筆者は館内には入れず彼女を連れて周辺を数時間にわたって彷徨い歩かねばならなかった．

犬も人と同じく晩年には大腿部が衰える．最後の約 2 か月間はタオルで下半身を支えてやり，散歩に連れ出した．しばらく歩くといかにも疲れたと見え，そのあとはぐっすり眠るのが日課であった．人類と犬との関わりの極めて長い歴史の流れの中で見れば，我が家での生活などほんの一瞬であろうが，17 年以上にわたって家族として過ごした「ふうちゃん」．ぽっかりと抜けた穴をどうやって埋めるのか，今，我が家のとても大きな課題である．